

木野

KINO PRESS.
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

通信

第85号

2025 Dec.

特集

ダイバーシティ × 表現を学ぶこと



卒業生インタビュー
きくちあつこさん(芸術学部卒)
半田俊哉さん(芸術学部卒)

ダイバーシティ×表現を学ぶこと

2016年に発表した「ダイバーシティ推進宣言」から今年で10年。京都精華大学は「多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合い、対等に機会が開かれること」をめざし、その方針を学内環境だけでなく、「表現を学ぶ」教育に取り入れてきました。世界中に分断と対立が広がる今、多様性を尊重する表現教育はどうあるべきか。どんな学生を育て、社会に何ができるのか。メディア表現学部 吉川昌孝、デザイン学部 岸川謙介、マンガ学部 下村浩一、3人の学部長が語り合いました。

——まずはそれぞれの学部では、どのような多様性が見られ、周りはどう受け止めているか、現状を教えてください。

下村 マンガ学部は留学生が多く、アニメーションや新世代マンガのコースは半分以上、キャラクターデザインで約4割ですね。国籍はほとんど中国と韓国ですが、なかには働いていたのを辞めて大学に入り直したとか、欧米留学経験がある人もいます。だから年齢は幅広く、英語ができる人も多いです。

性自認は本人がカミングアウトしないかわりませんが、トランスジェンダーだという学生が過去に2人いました。実際はもっと多いと思います。

岸川 デザイン学部は留学生が約3割を占め、中国・韓国のほか、東南アジアや中東、ヨーロッパまで多様な出身地域の学生が集まる環境です。

また、建築学科には、病気の後遺症で模型制作が難しいなか、CGを駆使してメタバース（仮想空間）での設計に挑戦した学生もいました。卒業後はユニバーサルデザインの研究を志し、他

大学の大学院へ進学しています。

吉川 メディア表現学部は2021年に開設された新しい学部で、専攻はバラエティ豊かですが、留学生はまだ多くなく、1割といったところです。

ただ、ジェンダーレスな格好の人は普通にいますし、障害があり電動カートで移動する人もいます。街から離れた立地も含め、キャンパスの環境から学生たちは自由な雰囲気やダイバーシティを自然と感じ取っている気がします。「自由自治の大学だから」と、学生もよく言いますしね。

岸川 セイカが2016年と2018年に発表した「ダイバーシティ推進宣言」をあらためて読んでみたところ、2018年版にこんな一文があります。〈違いを理解しようとするプロセスで生まれる「価値観の変化」や「他者への想像力」こそが新しい発見や思考に

つながり、構成員全体の創造性を高める〉——。

これってまさにデザインの発想なんですよ。デザインの役割のひとつは、社会の問題を解決するソリューションなので、他者への想像力を養える環境に大学時代から身を置くメリットは大きい。身体感覚や感受性にも影響します。生まれ育った土地が違えば、食べ物や価値観、空の見え方も違う。異なる文化を持つ人と接すると、たとえば「同じ青色でも見え方が違う」と気づかされたりする。無意識に感じたそういう刺激が、何かのきっかけで表現に現れてくることもあると思います。

下村 あの宣言を初めて聞いたときは、「どう進めるの?」と心配しましたが、こうした宣言をすること自体が学生の刷り込みになるというか、強く意識はしなくても、どこかに影響しているように思いますね。

吉川 他の大学へ行くと、学生はみんな同じように見えますが、セイカは一人ひとりが全然違う。服装も、生活も無理しているわけでもなく、伸び伸びして。

——多様性を体感することが、表現にどう活かされるのでしょうか。

岸川 たとえば、グラフィックデザインコースの3年次には文字プロジェクトという授業があり、日中韓の学生が

(写真右から)

吉川 昌孝

メディア表現学部 学部長

〔専門分野〕

マーケティング・
コミュニケーション/
広告／メディア論

岸川 謙介

デザイン学部 学部長

〔専門分野〕 建築設計

下村 浩一

マンガ学部 学部長

〔専門分野〕 3DCG

合同で「グローバルフォント」を制作したこともありました。どの言語を使う人にも自然に見えて、しかも統一感のある新しいフォントを生み出す取り組みですね。

下村 マンガ学部の授業や制作で多様性をテーマにすることはないので、学生の意識や関心は高く、時折そういう作品が見受けられます。

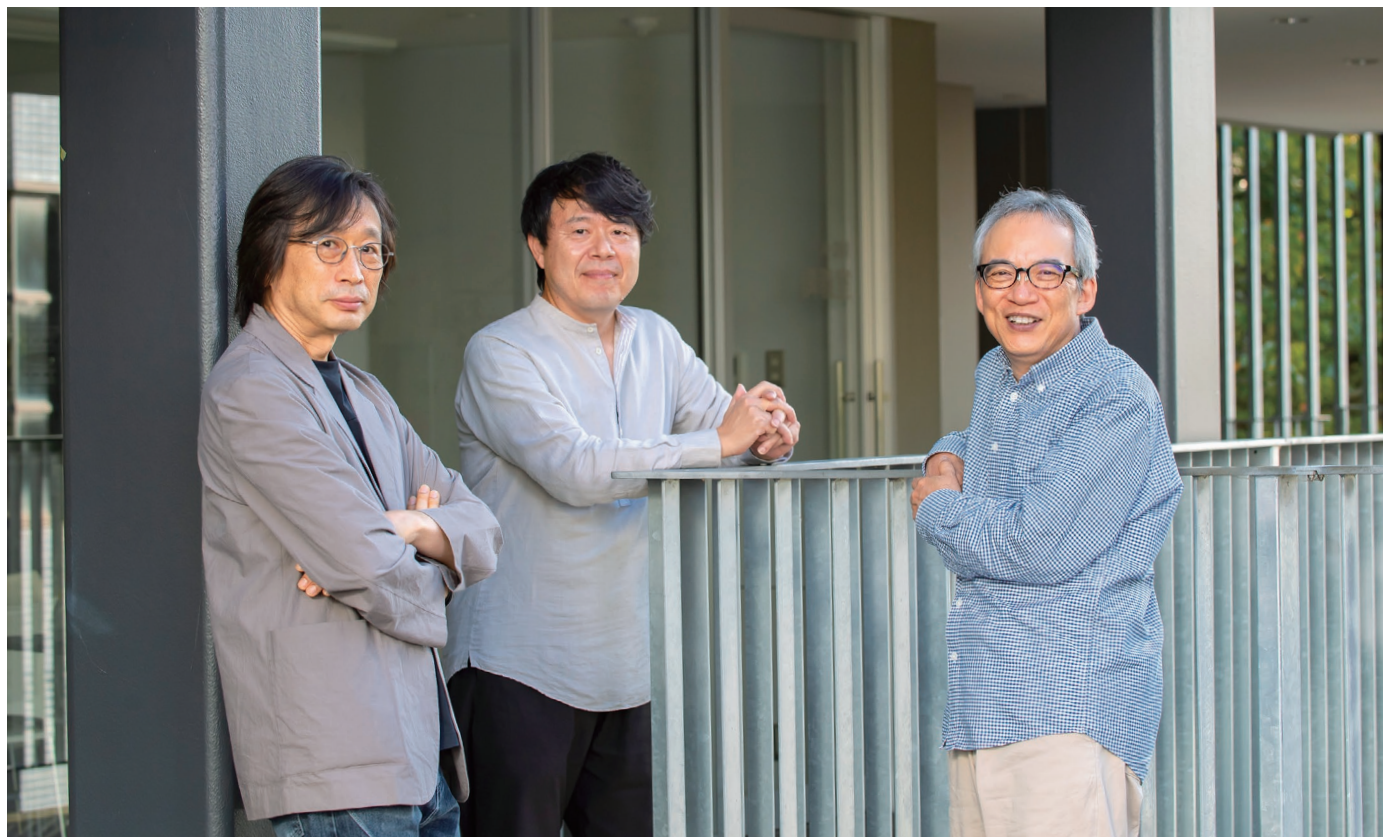
今のアニメーション、とくにアメリカの作品は人種やLGBTQの問題を、かなり意識的に強調しています。ピクサーの『バズ・ライトイヤー』には女性同士の結婚シーンがあり、同性婚を禁じる国では公開できないのですが、それでもカットされません。2021年に製作されたディズニーマの短編映画は、中国人の男の子2人が主人公ですが、1人は女の子っぽい設定。日本語版のタイトルは『リトル・プリンセス』という表記でした。

日本ではBL(ボーイズラブ)が人気で、一大ジャンルになっています。マンガ学部でも来年度から「BLマンガ実習」「BL論」という選択科目を始

めますが、「ぜひ受けたい」という学生が多いですね。また先ほど、色の見え方の話が出ましたが、色覚異常の女の子が主人公のアニメをつくった学生もいます。実際に色の見え方が異なる友だちの協力を得て、その人にしか見えない図を入れたりしていました。

われわれ教員があえて言わなくても、今の社会は多様性への意識が強いので、題材は数多くあり、取り入れる学生も少なくない。ただし、マンガやアニメというエンターテインメントとして成立させる難しさはあるのですが。

吉川 メディア表現学部の場合、音楽からメディアアート、WEBデザインやアプリ、パフォーマンスまで表現が幅広いので、アウトプットの形がかなり多様なんですよ。今年初めての卒業展で数えてみたら19ジャンルもあって、いったい何をする学部なんだと(笑)。でも、コミュニケーションを仲立ちして環境を活性化させるものはすべてメディアだから、ひとつに偏らず、いろいろあるのがむしろいいことだと僕は思っています。何をつくってもいい自



由さのなかで、たとえば色覚異常の人に横断歩道を知らせる音楽とか、LGBTQがテーマの作品も出てくる。学生には「専攻を越えるように」と常に言っています。異なる表現を選んでも、誰かと共同作業してもいい。音楽表現専攻の学生が、膨大なコスメ商品データをメディア情報専攻の友だちと一緒に調べ、卒論や卒業制作にした例もありましたね。

岸川 21世紀のデザインは身体的ハンディへの配慮が当たり前に求められるので、そういうプロジェクトもたくさんあります。プロダクトデザイン学科では、「ハイヒールを履ける義足」を制作した女子学生が理事長賞を受けます。



したし、視覚障害者が無人コンビニを利用できるように、タッチレスで商品情報がわかるデバイスの開発に取り組んだ学生もいました。建築では公共空間のデザイン。たとえば日本では東京五輪2020の頃からオールジェンダートイレが広まり、大阪・関西万博でも話題になりましたね。

吉川 オールジェンダートイレは、セイカが早かったですよ（2017年設置「みんなのトイレ」）。その面でもダイバーシティが進んでいるな、と。

岸川 多様性を理解し、人に伝えるにはやはり他者への想像力がすごく大事です。それは自分のやっていることが他人に影響する、すべてつながっていると知ることだと思っんです。たとえば世界の人口は2050年頃に100億人になる。日本の人口は減っているけど、世界全体ではニューヨーク規模の都市が毎月ひとつ増えていく計算なんです。それを知ると、エネルギーをこんなに使っているの？という問題意識が心のなかに生まれるじゃないですか。

環境について学ぶ授業では「7代先のことを考えて行動せよ」というアメリカ先住民の言葉がよく言われます。あなたが今やることは7代先の子孫まで影響するんだと。デザインをする人はとくに、これからの世界や環境について知っておいてほしい。

吉川 僕の領域で世界的な課題を言えば、メディアが生む分断ですね。セイカはたしかに多様性あふれる大学ですが、学生のメディア環境は、自分が好む情報に囲まれた「フィルターバブル」や「エコーチェンバー」に陥ってしまっている。スマホ検索で出てくる情報は、自分が見たいものに合わせたアルゴリズムの結果だから、検索順位の高さと正確さに関係ない。自分のスマホでいくら検索を繰り返しても、多様な情報は得られないと説明するのですが、授業で何か質問すると、検索で



ヒットしたAの答えからピックアップしてくる。どのサイトの情報かと聞いても、出どころがわからない。ずっとスマホを使っていると、それが世の中だと思ってしまうんですよ。

下村 自分の見える範囲で「正しいこと」を決めてしまっんですよね。学生に限らず、人間そういう傾向がある。

吉川 何もの○○○を使うな、対抗しろと言っているわけじゃなくて、そういう情報環境にあると十分理解したうえでメディアをつくらうということです。世界が多様なのはハッピーだけど、それがバラバラに分断されてたら最悪じゃないですか。考え方は違っていいでも、それらが平和に共存しない。今日の話に出たコミュニケーションや他者への理解って、そういうことだと思います。

誰もが学びやすいキャンパスをめざして

ダイバーシティ実現への取り組み



ダイバーシティ推進宣言では、誰もが平等に学び、教育・研究し、働けるキャンパス環境の整備を掲げています。この方針に沿って授業内容、学生サポート、施設の充実と改善を進めています。

授業科目の新設

発達障害や極端に苦手な作業のある学生のためのキャリア科目「ソーシャルスキルトレーニング」

コミュニケーションが極端に苦手、気が散って集中力が続かない、締切や時間を守れない……このような発達障害の人に多い特性があるため、自分に自信が持てず、将来に不安を感じている学生は少なくありません。近年、全国的にも発達障害の特性のある大学生は増加傾向にあり、京都精華大学でも支援の重要性が高まっています。こうした学生が安心して学び、社会に踏み出す力を育てるために、2025年度から全学共通科目として開講されたのが「ソーシャルスキルトレーニング（SST）」です。

SSTは医療的な治療ではなく、社会生活で直面する課題への「対応」を学ぶ実践的なキャリア科目です。就労移行支援事業所の指導メソッドをもとに、発達障害の当事者や専門研究者、支援の現場で働くゲスト講師を招き、社会で生きる力を多面的に学びます。学内外が連携し、困難を抱える学生に寄り添う体制が整えられているのも、この授業の大きな特徴です。

授業では、個別面談や自己理解ワークショップを通じ、自分の特性や困りごとを言葉にし、他者に伝える練習を行います。また、社会で活躍する発達

障害当事者の体験談や、専門家による支援制度・就労の現場の話や聞くことで、自身のキャリアを考えるきっかけにもつなげています。

担当教員のひとりの渡猛さんは、俳優業のかたわら、企業や学校で即興芝居のワークショップを開き、コミュニケーションや自己表現を指導しています。セイカでも長年、授業を行うなかで、発達障害やそれに近い学生の増加を肌で感じてきました。人前での失敗や誤り、それに目立つことを恐れる受講生が多いため、安心して自己開示できる場をつくるのが大切だと渡猛さんは言います。

「話を聞くときは、自分のなかに正解を持たないように心がけます。こちらの望む答えを学生は敏感に察するので。それと、できる限り細かく聞くこと。『難しかった』と言えば、具体的に何が？どの瞬間が？難しいってどういうことだろう？」と質問を重ねる。そうすると、彼らが本当に感じている思いが言葉になっていくんです」

授業を受けた学生たちは、こんな感想を寄せています。

「自分で自分の可能性を奪っていたことに気づき、挑戦する楽しさを知った」

「授業前の不安が、ワークを通して人と関わるうちに消えていった」

SSTで得たスキルが自信を生み、社会で働く力になっていきます。



発達障害支援の新科目「SST」の授業風景



学生への取り組み

一人ひとりに寄り添う、大学の安心サポート

- 性別違和、通称名使用などの事由による学籍簿の氏名・性別記載変更を認可
- 定期健康診断で、性別違和や健康上の事情を抱える人を対象に専用の時間帯設置
- 大学で発行するすべての証明書から性別の記載を取り消し
- 障害学生支援室の設置および、修学に困難のある学生の学修支援



キャンパスライフを安心して送られるようサポートしている



デザイン学部建築学科3年生が設計課題で制作した、授乳や祈祷等のための多目的空間

キャンパスの改善

毎日の過ごしやすさを、設備の面から支える

- 多目的トイレ・オストメイト対応トイレの設置拡充
- 授乳や休養に利用できるスペースの整備
- 学食のメニューに食肉表示を記載
- 誰でも利用できる「みんなのトイレ」を学内24力所に設置
- 生理用品無償配布サービス機器
- 「LOUNGE」を学内トイレ内個室に設置
- 無線LAN環境や学内ネットワークのアクセシビリティ改善
- 国際教育寮「修交館」や言語学習支援室「C-Cube」など、学生交流スペースの拡充

MESSAGE

遠い夢、大学の夢

学長 澤田昌人

『イクストラランへの旅』という本のなかに、アメリカのエリート大学院の学生が、調査で訪れたメキシコの原住民に「わしとお前は平等か？」と尋ねられる場面があります。その学生は「もちろんそうだよ」と答えるのですが、相手に「いや、違う。わしは狩人だし戦士だが、おまえは下郎だからな」と返されて唖然としてしまいます。

エリート学生は、当然ながら「人間の平等」という理念を信じていたので、学歴も社会的地位も「低い」原住民の老人に「私たちは平等だよ」と答えるべきだと思っていたのでしょう。しかし彼の理念は拒絶されたのです。「平等」とは誰かが一方的に認めることではなく、お互いが認めて初

めて成り立つことだからです。そもそも生まれも育ちも異なる私たちが、お互いが「平等である」、つまり多様性（ダイバーシティ）を越えた共通の人間性をお互いのなかに見つけることができるのでしょうか。

キング牧師の有名な演説に「私には夢がある。それは、いつの日か、私の小さな子どもたちが、肌の色によってではなく、人格そのものによって評価される国に生きたるようになることだ」という一節があります。互いに平等で、自由な共存を夢見てその実現を追求していくことが、私たちの大学の使命です。本学が「ダイバーシティ推進」を掲げる理由はそこにあるのです。



澤田 昌人 学長
アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民、農耕民の世界観についての研究、および中部アフリカの現代史に関する研究を行う。

Q

多様性のある環境で学ぶことが、どんな力を与えてくれると思いますか？

視野が広がる。自分の可能性を感じる。
メディア表現学部 1年

異なる学部の授業を受講することや、学んで得意になったことをお互いに聞いてアイデアから着想を得たり、自分の描き方の参考にできたことがある。
マンガ学部 2年

交流することで、視野が広がり考え方も広がる。考える能力が上がらと思う。
芸術学部 1年

留学生との交流は語学含め文化的観点で新たな知識が得られます。また、異なる分野の仲間は情報の収集源が違うため、意見を交わすなかでより多くの視点で物事を考える力がついたと感じています。
マンガ学部 2年

留学生の友だちは作品のなかにその国らしい文化を加えて制作をしている子が多く、私は「そんなアイデアがあるのか!!!」と良い刺激を受けて日々過ごしています。
デザイン学部 2年

将来について明確なイメージができる。
メディア表現学部 1年

多様な人と関わると、「この人の価値観は分かる」「これはあまり分からない」など、自分にとって何が大切かに気づけます。また、作品を通してその人の生きてきた世界を見ることが出来ます。
デザイン学部 4年

いろいろな人と関わることで今まで自分が持っていた価値観が変わったり、「私」というものがより形成されていっている気がします。
国際文化学部 1年

さまざまな国籍の人と出会うため文化の違いに触れられる点では新鮮な経験ができます。仲良くなればなるほど、他の国に興味を持つきっかけにもなるため、学問に止まらずに視野を広げることにもつながります。
芸術学部 4年

日本以外の国から来た学生との出会いは刺激になったと感じています。わかりやすく伝えることやサポートする力は以前より身につきました。
メディア表現学部 1年

VOICES

多様性について在学生のリアルな声を集めました！



人と人をつなぐ建築。
暮らしに寄り添う設計を大切に。

半田 俊哉さん
Handa Toshiya

エイチ・アンドー級建築士事務所 代表

芸術学部 デザイン学科 建築専門分野
2002年卒業



事務所には自身が運営する書店「月書房」も併設。気軽に足を運べるよう、開放的な空間に

丹波篠山での暮らしとともに歩む半田さんの建築が、これからどんな出会いや風景を生み出していくのか。未来への物語は、この先もずっと続いていきます。

「丹波篠山での暮らしとともに歩む半田

自然豊かな兵庫県丹波篠山市で建築設計事務所を経営する半田俊哉さんは、地元の木材や石材を積極的に用い、風景に溶け込む住宅や施設を手がけています。「設計する際には地域の歴史や地質など、その場所を深く調べます。また、施主様の生い立ちもヒアリングし、どんな空間がふさわしいかを自分なりに咀嚼して建物に落とし込むようにしています」設計を通して「人の暮らし」を見る半田さん。しかし、この仕事の仕方にたどりつくまでには紆余曲折があったと言います。「何度か悩むなかで、思い切った建築設計から離れてみよう、20代後半に青年海外協力隊員としてエチオピアに渡りました。貧困国のひとつと言われるだけあり、日本にあつて当たり前のものは、当然ほとんどありません。しかし、住民同士の暮らしの距離が近く、誰もが幸せそうに暮らしていました。このとき、本当に大切なものは『物がある豊かさ』ではなく『人と人とのつながり』なんだ

と気づいたのです」

帰国した半田さんは2012年に神戸で独立し、その後、奥さまの地元・丹波篠山に移住。現在に至るまで、この土地で家族や仲間たちと田畑を耕し、ときには近隣の山から建築材料を伐採しながら、地域の人と深く関わる日々を送っています。「私にとって建築は、人と人との関

セイカの思い出

交換留学で南カリフォルニア建築大学へ。ノートでのスケッチを禁じられ、とにかく模型をたくさんつくりました。



交換留学で南カリフォルニア建築大学へ。ノートでのスケッチを禁じられ、とにかく模型をたくさんつくりました。

交換留学で南カリフォルニア建築大学へ。ノートでのスケッチを禁じられ、とにかく模型をたくさんつくりました。

交換留学で南カリフォルニア建築大学へ。ノートでのスケッチを禁じられ、とにかく模型をたくさんつくりました。

交換留学で南カリフォルニア建築大学へ。ノートでのスケッチを禁じられ、とにかく模型をたくさんつくりました。

交換留学で南カリフォルニア建築大学へ。ノートでのスケッチを禁じられ、とにかく模型をたくさんつくりました。

交換留学で南カリフォルニア建築大学へ。ノートでのスケッチを禁じられ、とにかく模型をたくさんつくりました。



積み重ねた1枚1枚が
「等身大」の表現を生む。

卒業生インタビュー

独自の道を歩む京都
現在の活動や今後の夢、

精華大学の卒業生に、
セイカの思い出を伺いました。

セイカの思い出

悩むことが多かった学生時代。そんななかで、作品のコンセプトを大切に作る姿勢など、あらゆるヒントをもらいました。



扉を開いていきます。

そんなきくちさんの目標は、文化の面白さを探求しながら、周りに広める役目を担うこと。等身大のまなざしから生まれるひとつひとつのイラストが、新たな

子育ての合間に描き始めた1日1枚のイラスト。それをSNSに投稿し始めたことが、きくちあつこさんをイラストレーターの道へと導きました。「大学卒業後は、アパレル業界に就職しました。その後は出産を機に仕事から遠ざかっていたので、シルクスクリーンの製版をしている会社で働き始めたことで、大学生生活の思い出がよみがえり、もう一度、ものづくりに携わりたいと思ったんです」と話すきくちさん。そこで始めたのが、子育て日記やファッションイラストをInstagramに投稿することでした。当時は写真の投稿が主流で絵を載せているアカウントは珍しい存在でした。出版社や企業の目にとまり、少しずつ依頼へとつながっていったそう。

現在では、ファッションカタログの挿

絵など幅広い分野で活動を広げています。

洋服の絵の投稿から、通販会社・フェリ

シモと服飾アイテムのコラボ商品の開発

をしたり、学生時代に通学で使っていた

京阪電車から依頼を受けたりするなど、

縁のある仕事も増えています。『源氏物

語』をひもとくパンフレットのイラストでは登場人物が多く混乱した実体験から、一人ひとりにキャッチコピーをつけて違いを出す提案をしたんです。積極的に関わってうれしかったです」

きくちさんのイラストは、おしゃれな

タッチでありながらも、思わずクスッと

笑えたり共感したりと、どこかあたたか

みのある雰囲気の特徴です。「上から目

線になっていないか、自分を客観視しな

がらアウトプットすることを大切にして

います。背伸びをしすぎず、子育てをし

ている日常的な視点は常に持っていたい

です。それでいて、世の中の流れの半

歩先を見据えた提案を心がけるのがモッ

トです。こうしたクリエイティブへの

姿勢は、セイカで培ったものです」

そんなきくちさんの目標は、文化の面白さを探求しながら、周りに広める役目を担うこと。等身大のまなざしから生まれるひとつひとつのイラストが、新たな



京阪電車で配布されている源氏物語のパンフレット。たくさんの文献を読んで登場人物のキャラクターを掴んだのだそう

セイカから世界へ

—教員研究紹介—

教員が研究について語る連載の第3回。今回は、「岩倉木野町郷土史料の社会還元プロジェクト」に取り組む白井裕子先生・小川仁先生・吉元加奈美先生に話を聞きました。個性豊かな3人が、それぞれの専門知識や研究実績を生かして、社会のために力を合わせます。

木野愛宕神社に伝わる歴史を、次世代へつなぐ。異なる専門分野を研究する3人の共同プロジェクト。

木野で暮らした人たちの日々の姿を映し出す文書

大学から徒歩約10分の場所にある木野愛宕神社には、この地域に伝わる16〜19世紀の歴史史料が数多く残されていた。その数は2398点。住民たちは年に1回の虫干しを欠かさず、慎重に保存をしてきた。2017〜2019年には、人文学部の授業「フィールド・スタディーズ」で学生たちと史料目録を作成したこともある。しかし近年は、保存の担い手不足などの理由から、史料は京都市歴史資料館に預けることになった。現在は、その9割以上が資料館に収められている。

地域のアイデンティティを現代の技術を活用して後世へ

2023年から国際文化学部教員となった白井裕子先生は、授業「地域研究入門」のフィールドワークで木野町を訪れるなかで、次第に町の人と交流するようになった。「史料の存在を知ったのは、保存に関わった方々に話を聞いたことがきっかけです。地域で守ってきた史料に皆さんが誇りをもっておられる一方で、それが今手元ないことを寂しく思っておられることを感じました」（白井先生）。

白井先生は、2019年の目録作成に関わった吉元加奈美先生にも協力を仰いだ。吉元先生は、日本近世史を専門に和泉市の歴史調査に携わった経験を持ち、地域史料の扱いに詳しい。先生も喜んで申し出を引き受けたという。「今は、江戸時代から続く村や町といった共同体の地域性やつながりが、次の世代に継承されるか否かの過渡期だと考えています。地域で守られてきた史料は、その土地のアイデンティティそのもの。これを現代の技術で次世代へつなぐことは、歴史家として意義のある仕事だと感じています」（吉元先生）。

「岩倉木野町郷土史料の社会還元プロジェクト」に取り組む3人

白井 裕子
人文学部 国際教養学科 共通教員／
国際文化学部 グローバルスタディーズ
学科 共通教員



専門は農村社会学。東南アジア大陸部の農村地域を対象に、農業や人々の暮らしの変容とその要因について研究。



専門は日伊交流史。天正少年使節など、ヨーロッパに渡った日本人がどのように受けとめられたかを研究。



専門は日本近世史。都市史や地域社会史に関心をもつ。主な研究対象は、江戸時代の遊所や遊廓。



11月3日、木野町住民の方々に向け、研究概要や史料の内容について紹介する会が催された

KEYWORD

「岩倉木野町」とは？

京都・嵯峨にある嵯峨愛宕神社・野々宮神社の神主職を務めていた土器師（かわらけし）の人々が、この地に移って集落をつくった。木野愛宕神社所蔵史料には、村の運営や土器づくりに関する文書、神主職に関する文書などがある。

木野からヤツホー



あの先生元氣かな…？
そう思っている卒業生のみなさんへ、セイカの教員からのメッセージです。



磯辺 ゆかり

人文学部／国際文化学部
英語教育・応用言語学
（第二言語習得研究）

英語をもっと身につけよう！
ランサボを本格始動。

2025年度4月から明窓館2階の言語学習支援室（Language Learning Commons: LLC）にて英語を中心とした外国語学習を応援するランゲージサポート支部（通称：ランサボ）が本格指導しました。英語学習を1年間だけでおわらせるのはもったいない！在学期間を通してコンスタントに語学に触れられる機会を提供しています。全学向けのTOEICオンライン講座（今なら無料）や気軽に留学生と英語でおしゃべりするEnglish Timeなどの様子をポッドキャストで流しています。季節ごとのイベント情報もInstagramにあります。興味のある方はぜひLLCにお立ち寄りください。



学習環境が整った言語学習支援室は、いつも賑わっています



安田 昌弘

メディア表現学部
メディアコミュニケーション専攻
（ポピュラー音楽研究／文化社会学）

変わっていく同じゼミと
変わらない想い

2009年人文学部→2013年音楽コース→21年音楽表現専攻→26年メディアコミュニケーション専攻。ここまで所属が変わる教員はいないのではないかしら（必要だから声がかかるのか、邪魔だから飛ばされるのか）。R・ジョーンズという黒人運動家がいる、黒人の音楽は「変わっていく同じもの（the changing same）」だと指摘しています。僕はこの言葉が大好きで、僕のゼミもこんな感じで運用出来ているといいなと思っています——変わっていく同じゼミ。そのジョーンズの和訳の初版を情報館で見つけて感涙した私も今では情報館長です。



音楽の新しいあり方に思いを馳せながら、一乗寺公園でのお祭りを企画しています



中村 光宏

デザイン学部 イラスト学科
（グラフィックデザイナー）

叡山電鉄100周年
巨大看板イラストに挑む！

今年の夏、本学は、叡山電鉄、京都芸術大学と連携し、叡山電鉄100周年記念アートプロジェクトを実施しました。イラスト学科は、叡山出町柳駅ホーム沿いに、高さ約1.8m、幅約24mの巨大看板イラストの制作に取り組みました。参加学生は、テーマ「未来のえいでん」から発想し、過去から現代までの100年、そして100年後の未来へ向けたメッセージを作品に込めました。2年生と3年生の有志がチームとなって、すべての工程を手描きで仕上げています。当初は看板の大きさに圧倒されながらも、学生たちは最後まで描き切ることで、大きな自信を得ることができたと思います。



完成間近の力作と共に

私のお気に入り

人生初のボーナスで買った腕時計。以来37年、故障知らずで、着ける本人がガタつき始めてます。



私のお気に入り

自分で組み立てた自転車で、17歳の息子くんとしまなみ海道を尾道から今治に向かっていくところです。



私のお気に入り

在外研究中に通ったノッティンガム大学の最古の校舎。歴史を感じる自然のなかで完成する様式美。



ZINEカルチャーを収集し、発信する場へ



トークイベント「ZINE TALK 02」
2025年9月27日(土) 京都精華大学情報館

京都精華大学情報館では、2025年度より新たに「ZINE(ジン)」の収集に取り組み始めました。ZINEとは、自分の伝えたいことを自由に綴る自主制作冊子のことです。マイノリティの声やポリティカルな主張を届けるための表現手段として育まれてきました。

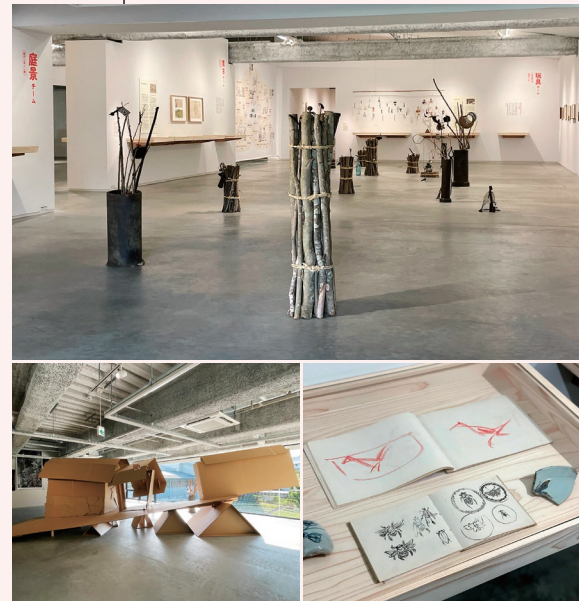
この取り組みの一環として、情報館ではZINE交換会やゲスト講師による選書を実施。10月末時点で約80冊のZINEが集まりました。今後はさらに収集を進め、館内で多様なZINEを自由に閲覧できる環境を整えていきます。

また、ZINE文化を知るための公開イベントも開催。9月27日には、トークイベント「ZINE TALK」

02」を実施。大阪を拠点に活動する「ぼんつく堂」主宰・六野明日香氏と、神戸で文芸誌『オフショア』を発行する山本佳奈子氏を迎え、ZINEをつくり始めたきっかけや印刷の工夫、そして商業的にも注目を集めつつあるなかで、どうやって弱者のための表現手段としてZINE文化を守っていくか、そんな課題について語ってくださいました。

情報館でのZINE収集は、交換会や講演会を通じて少しずつ冊数が増え、多様な作品が集まりつつあります。学生や利用者の方がZINEに触れるきっかけとなり、身近な表現文化に触れる入口になつていくことを期待します。

人間国宝・石黒宗麿氏の暮らしをめぐる展覧会を開催



「スケッチーズ | 八瀬の石黒さん家から見た世界」
2025年6月27日(金)～8月3日(日) ギャラリーTerra-S

ギャラリーTerra-Sでは、6月27日から8月3日まで企画展「スケッチーズ―八瀬の石黒さん家から見た世界」を開催しました。陶芸家・石黒宗麿氏が窯を築き、晩年までこの地を拠点に作陶を続けた京都市左京区八瀬の自宅から見える多角的な世界を展示しました。石黒氏は鉄釉陶器の技法による重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されるなど、中国や朝鮮の古陶磁に迫る研究を行いながら、独自のエスプリを持つ作家として広く知られています。1956年には「財団法人八瀬陶窯」を設立し、没後も八瀬陶窯は関係者による管理を経て、2003年から本学が施設管理を引き継いでいます。

本展覧会では、「陶芸」「建築」「庭景」「集古」「玩具」のテーマごとに作家や研究者、専門家でチームを構成。作家らは石黒氏が残したスケッチをもとに地域の風景や風習、創作の意図を想像しながら読み解き、作家自らも八瀬に通いました。会場ではその成果の作品を石黒氏のスケッチとともに展示。どの展示も、石黒宗麿というひとりの作家の生き方と、その足元に広がっていた世界を、もう一度見つめ直そうとする試みでした。多様な専門分野が交わることで生まれる、文化の広がりや新たな視点を発見できる貴重な時間となりました。

学園祭「木野祭2025」を開催しました

11月1日、2日、秋晴れのもと学園祭「木野祭」が開催されました。学生たちが企画から運営まですべてを担い、それぞれの専門や興味を生かした表現を形にする2日間です。作品展示やパフォーマンス、模擬店やワークショップなど、学生ならではの発想と工夫が光る多彩なプログラムが展開されました。版画専攻の学生による「版画商店」や陶芸専攻による「陶器市」、ビジュアルデザイン学科の学生によるグッズ販売、マンガ学部による似顔絵コーナーやマンガ製本ワークショップ、国際化学部の学生による多国籍料理の販売、メディア表現学部の学生による音と光を融合させたDJ

ブースなど、各分野の学生が日々の学びを活かし、それぞれの生み出す表現によって互いに刺激を与え合いました。

両日を通して、卒業生や高校生、地域の方々など多くの来場者がキャンパスを訪れました。作品について語り合う学生と来場者の姿、ワークショップで笑顔を交わす光景など、世代や立場をこえた交流があちこちで生まれていました。日頃の学びを社会とつなぐ機会としても、木野祭は本学にとって大切な場となっています。学生一人ひとりの個性と学びが形となり、京都精華大学らしい自由でおおらかな空気がキャンパスに満ちた2日間でした。



木野祭2025
2025年11月1日(土)、2日(日) 京都精華大学

マンガで向き合う戦後80年

戦後80年の節目となる今年、京都国際マンガミュージアムでは、沖縄と京都の巡回展として7月12日から11月25日まで企画展「マンガと戦争展2」を開催しました。本展は、2015年に、同ミュージアムで制作・開催した「マンガと戦争展」の「続編」であり、節目に向けて企画された「最新版」という位置づけです。この10年間に同展は、国内だけでなくアメリカ合衆国を含めた6会場に巡回され、少なからぬ反響を呼びました。一方、最初の京都展開催から世界情勢はさらに混迷を深めています。日本国内でも「戦争」や「平和」は、抽象的な話ではなく、自分事として考えるべき切実なテーマと

して認識されつつあります。マンガに限らず「戦争」を描く近年のポピュラーエンタメ作品の特徴のひとつは、その舞台としてしばしば「戦中」のみならず、占領期と重なる終戦直後が選ばれていることです。「戦後」の文化として大きく花開いた日本のストーリーマンガは、戦争にまつわる体験や記憶からさまざまな影響を受けています。同展は戦後無数につくられてきた「戦争マンガ」を読み解くことで、戦争体験や記憶の継承に対し、私たちがどのように向き合ってきたか、そして、今後どのように向き合っていくべきかを考えるための、さまざまなヒントを発見できる機会となりました。



撮影：松見拓也

「マンガと戦争展2」
2025年7月12日(土)～11月25日(火)
京都国際マンガミュージアム

京都精華大学展2026 ー卒業・修了発表展ー

2026年2月11日(水)～2月15日(日)
※土、日はオープンキャンパス同時開催

〔会場〕京都精華大学

京都精華大学ギャラリーTerra-S ※入場無料

- 具口抽○
2026年1月9日(金)～1月17日(土)
- プロジェクト企画演習 2025 成果展
- アウトライン
2026年1月23日(金)～1月31日(土)
- 冷水機での対話 @ 左京区
(Water Cooler Conversations @ 左京区)
2026年2月27日(金)～3月7日(土)
- 高校生のための第7回創作物品コンペティション
「SEIKA AWARD 2026」入選作品展
2026年3月14日(土)～3月22日(日)

〔問い合わせ先〕
京都精華大学ギャラリーTerra-S(明窓館3F)
☎075-702-5263



京都国際マンガミュージアム

- 竹宮恵子監修 原画' (ダッシュ) 展示シリーズ
ハッピーをお届け! 田村セツコ展
～with松本かつづ、上田としこ、村上也とか、竹宮恵子～
2025年10月2日(木)～2026年1月20日(火)
- ニャイト・オブ・ザ・リビングキャット展
2025年12月13日(土)～2026年4月7日(火)
- オンライン展覧会
マンガ・パンデミックWeb展 2025
2025年12月15日(月)～

〔問い合わせ先〕
京都国際マンガミュージアム
☎075-254-7414



その他公開講座

- アセンブリーアワー講演会
- 公開講座ガーデン
など



サテライトスペースkara-S

- ショップ
 - ギャラリー
- 在学生、卒業生の作品が並びます。



活躍する在学生、卒業生の情報を募集しています。

情報をお持ちの方は、広報グループまでお知らせください。

- 京都精華大学 ウェブサイト
https://www.kyoto-seika.ac.jp
- 広報グループ
kouhou@kyoto-seika.ac.jp



News

05



フォックチン『当たり前のこと』2025年／修学院駅

叡山電車開業100周年記念
「未来のえいでん」アートプロジェクトを実施

京都精華大学は、叡山電鉄株式会社および京都芸術大学と合同で、「叡山電車開業100周年」を記念した「未来のえいでん」アートプロジェクトを実施しました。この企画では、10月末から約1カ月にわたり、叡山電車の駅ホームや待合室などを展示会場として、両大学が制作した作品を展示。京都精華大学の学生は周辺地域をリサーチして、その魅力と利用者へのメッセージを込めた多様な作品を、鞍馬線の12駅で25点出品しました。また、貴船口駅と鞍馬駅では、芸術学部教員の中野裕介(パラモデル)が学生7名と共同制作した作品を特別出品しました。叡山電車はこれからの100年の重要な目標として「地域との共生」を掲げており、その第一歩の活動に学生が協力しています。

News

06



藤野裕美子『過日の同居』2025年

瀬戸内国際芸術祭2025 高見島を中心に
本学関係者が作品を出品

3年に一度、瀬戸内海の島々を舞台に開かれる現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭2025」が今年開催されました。第6回となる今回は、春・夏・秋の3会期にわかれ、各地で多彩な作品が公開されました。秋会期では、高見島を中心に京都精華大学の教員・卒業生・修了生が多数出品。古民家を活かした展示や、除虫菊の家を舞台にしたインスタレーションなど、土地の記憶と表現が響き合っています。同窓会・木野会西日本支部が主催する「高見島鑑賞ツアー2025」も10月11日に開催されました。出品作家でもある小枝繁昭さん(短期大学美術科卒業)と藤野裕美子さん(大学院修了・現教員)の案内で島をめぐり、作家による解説を交えながら作品を鑑賞する貴重な機会となりました。

News

03



ファッションコース、おむつを通して
多様性を考えるデザイン提案

デザイン学部ファッションコースが、大阪・関西万博で開催された『O-MU-TSU WORLD EXPO 未来のおむつコレクション』に参加し、株式会社ワコールとコラボレーションして作品協力を行いました。6月24日、万博会場で「おむつ」をテーマにしたトークショーと、31点のデザインを紹介するファッションショーが開催されました。おむつメーカーや下着メーカー、伝統工芸の企業など多彩な参画者が集い、機能性とデザイン性を兼ね備えた「未来のおむつ」が披露されました。学生たちはワコールとの連携のもと、機能性を保ちながら、ネガティブな印象を払拭する新しいデザインを提案。体形や年齢、障害の有無にかかわらず、誰もがオシャレを楽しめる世界をめざして制作に取り組みました。

News

04



メディア表現学部3年生が、江戸時代から続く
一乗寺「鉄扇踊り」の継承に挑む

京都市左京区・一乗寺で、9月21日に開催された「一乗寺フェス2025」に、メディア表現学部の授業「社会実践実習」の一環として、安田昌弘ゼミの学生たちが参加しました。非常勤講師の岸野雄一さん、谷田晴也さんの指導のもと、地域の方々と音と踊りを通して新しい場をつくりあげました。手づくり楽器のワークショップや「メガヒット盆踊り」で盛り上がった後、登場したのは一乗寺のまちに江戸時代から伝わる「鉄扇踊り」。学生たちは保存会の方々からその歴史を学び、継承を目的に活動してきました。当日はステージで来場者に踊り方をレクチャーし、地域の方々とともに伝統を体験。ポップカルチャーと伝統芸能が交わる、メディア表現学部ならではの実践となりました。

News

01



アニメーションコースの学生作品が
アワードでグランプリ・準グランプリを受賞

「高知アニメクリエイターアワード2025」にて、マンガ学部アニメーションコース卒業生のShuzukuさんによる卒業制作『鯨を夢む』がグランプリを受賞。さらに在学中に編成した制作チーム「ランデブー班」の作品『ジョセリン・ラン・デブ』が準グランプリに選ばれました。本学関係者がグランプリに選ばれるのは、昨年に続き2年連続です。このアワードは、業界の第一線で活躍する監督やアニメーター、美術監督などによる厳正な審査を経てノミネート作品が選出され、その後に一般投票と最終審査を通じて各賞が決定します。今回も本学から多くの作品が入賞を果たしました。アニメーションコース関係者の、今後のさらなる活躍にぜひご期待ください。

News

02



京都の美大で学んだアーティストたちによる
滞在制作・展示プロジェクトに参加

京都精華大学、京都市立芸術大学、京都芸術大学、嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学が連携し、各大学を卒業・修了したてのアーティストを対象とした滞在制作・展示プロジェクト「Unis in Unison 2025: Kyoto Rising Artists Project」に参加。若手アーティスト19名が2期に分かれて、TERRADA ART STUDIO 京都に3カ月間滞在しながら制作を行い、アトリエ内で展示公開するもの。本学からは、芸術学部、デザイン学部、芸術研究科出身の6名が参加。8月25日から制作がスタートした第1期の作品は、11月7日から16日まで展示され、好評のうちに会期を終了しました。第2期の展示は来年2月13日から19日まで。アーティストたちの新たな一歩をぜひご覧ください。

～ご支援くださる皆様へ～ (ご寄付のお願い)

本学で学ぶ多くの学生の生活支援、本学のさらなる教育・研究活動の充実のため、温かいご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

● 寄付募集Webサイト

クレジットカード決済、コンビニ決済、インターネットバンキング決済など、ご希望の方法をご利用いただけます。



● リサイクル募金Webサイト(きしゃぼん)

本やDVDに加え、貴金属などの換金査定額がご寄付となります。

● 京都市ふるさと納税を通じたご支援

「『大学のまち京都・学生のまち京都』の推進～市内大学と協働！学生さんの挑戦を応援！～」をお選びいただき、応援したい大学に京都精華大学をご指定ください。ふるさと納税の寄付金の一部が本学の教育・研究活動の費用に充てられます。

2024年度は、法人・個人あわせて33,240,676円のご寄付をいただきました。加えて、リサイクル募金は276,954円分をお寄せいただきました。心より感謝申し上げます。2025年度も、本学のめざす「表現で世界を変える」教育・研究活動のために、ご支援・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

お問い合わせ
京都精華大学 経営企画グループ 寄付募集担当
E-mail: donation@kyoto-seika.ac.jp
TEL 075-702-5201
FAX 075-702-5391

京都精華大学

国際文化学部

人文学科
グローバルスタディーズ学科

メディア表現学部

メディア表現学科

芸術学部

造形学科

デザイン学部

イラスト学科
ビジュアルデザイン学科
プロダクトデザイン学科
建築学科

マンガ学部

マンガ学科
アニメーション学科

人間環境デザインプログラム

人文学部

総合人文学科

ポピュラーカルチャー学部

ポピュラーカルチャー学科

大学院

芸術研究科
デザイン研究科
マンガ研究科
人文学研究科

表紙の作品

『F×SOAP(エフソープ)』 2024年度 卒業制作
竹下愛華さん(デザイン学部 ライフクリエイションコース)

素 材：グリセリンソープ、着色料(石鹸)、
コートボール紙(パッケージ)
サイズ：75mm×75mm×75mm(パッケージ箱)



環境の指針であるカエルを通して生物の有益さを知ってもらうための石鹸ブランドです。カエルが感染症予防に一役買っている点、地球温暖化によって絶滅が危ぶまれている点に着目し、二酸化炭素排出国ランキングに沿ってその国に生息するカエル型の石鹸を79種制作しました。環境問題を身近に感じてもらうため、手に取りやすいような色鮮やかでポップなデザインを心掛けました。

木野通信

KINO PRESS.

木野通信 第85号
2025年12月15日 発行
京都精華大学 広報グループ
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137

『木野通信』送付先の変更について

ご住所等の変更を希望される方は、木野会ホームページまたはFAXで変更事項をご連絡ください。

京都精華大学
経営企画グループ 木野会事務局
<https://seikajin.com>
E-mail: kinokai@kyoto-seika.ac.jp
FAX 075-702-5391

